

# さいばいだより

平成 20 年 1 月  
第 42 号  
鳥取県栽培漁業協会・鳥取県栽培漁業センター  
鳥取県東伯郡湯梨浜町大字石脇 1166 番地  
TEL 0858-34-3321

## キジハタ稚魚を放流

鳥取県漁協酒津支所で、キジハタの稚魚合計 12,000 尾（全長約 9.5cm）を放流しました。



平成 19 年 10 月 29 日に、キジハタの本放流に先行して、鳥取市立ひかり保育園の園児による記念放流が、酒津漁港にて実施されました。マスコミ等も訪れ、和やかな雰囲気の中で放流が実施されました。

放流に参加した園児達は楽しそうに海に放たれた稚魚を眺めていました。

本放流の 11 月 1 日には、酒津地区の多くの漁業者の方々が参加し、漁船により地先の磯場へ稚魚を放流しました。

放流された稚魚達は速やかに潜行し、石の隙間や海藻の陰などに身を隠していました。



本事業は全国豊かな海づくり推進協会の実施する栽培漁業実証化試験により種苗を譲り受け実施しました。酒津地区では、放流事業だけでなく、全長 22cm 以下のキジハタを再放流するなど、資源管理的な取り組みも積極的に行っています。

# お初にお目にかかります

## (財)栽培漁業協会がアユの生産…なぜ？

ただ今、栽培漁業センターの水槽でアユの稚魚が元気に泳いでいます。「アユって川の魚でしょ？」っていぶかる方もいるかもしれません。しかし紛れもなく、数にして数十万尾あまりの稚魚が群れを成して餌をはんでいます。この稚魚たち、昨年の秋に栽培漁業センターで生まれたものですが、れっきとした(財)栽培漁業協会(以下、協会と略す)の新規事業として取り組まれているものです。これには少々、いや多々訳がありまして……。

まず、「なぜアユなのか？」については遡ること3年前。ある内水面漁協の役員さんから「協会がアユが作って貰えんかなあ？」との要望を受けたことから始まります。これまで海の仕事しかしてこなかった我々ですので、アユについてはまったく素人。しかし役員さんの話を伺うにつれ、アユの放流事業を取り巻く環境はかなり厳しく切実なことが伝わってきます。

ここ数年「冷水病」という細菌感染によって起こる病気が蔓延し、放流してもアユが生き残らない、アユの元気が無くて釣れないということ。川の環境が悪くなっていて天然魚の遡上が阻害されたり、産卵できなかつたり、鳥に食べられたりすること。役員さんの話からはなんとかこの現状を打開したいとの熱意が感じられました。そして究極の目標は、「自分の川のアユを増やしてプラ



ふ化後約3ヶ月のシラスアユ

ンド化したい」とのことでした。また、これまでは放流用のアユの殆どを県外から買ってきているので、それをなんとか自分の川の親を使って増やしたいとの考えもあるようでした。ひととおり話は伺ったものの、現在の協会には水槽と水はあっても技術が無いこと。そして「沿岸漁業の振興」という協会の設立目的から外れるので、現在の寄附行為では事業として取り組めないことなどをお伝えしました。



ところが時をほぼ同じくし、協会が県の監査委員事務局の監査を受けた際、「内水面漁業に

ついて、県栽培漁業センターは様々な試験研究を行っているが、協会は業務の対象としていない。今後は内水面との関わり方を検討するべし。」との意見を戴きました。これはいわんや、協会がこれまで培った技術を内水面においても活かさないのはもったいないのではないかという指摘です。また、行財政改革の一環で公益法人の経営的自立を求められていることもあり、協会としても何らかの新たな事業を得る必要性がありました。

鳥取県では栽培漁業センターとアユの種苗生産は馴染みがありませんが、実は他県の多くの栽培漁業センターでは事業として取り組み、活発に技術や情報の交換をしています。むしろ今まで取り組んでない方が不自然というくらいです。なぜなら、アユは一生のうちの半分、稚魚時代の多くの時期を海で過ごすため種苗生産には大量の海水が必要だからです。



ふ化直後のアユ仔魚の頭部



放流を待つアユ稚魚

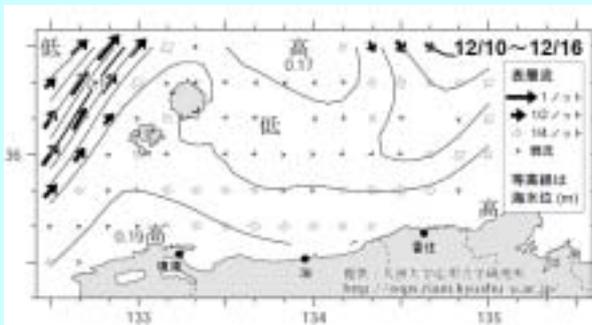
これらの事情を考慮し検討した結果、協会がアユの生産に取り組み、全国の先端技術や情報を取り入れつつ、これまでの経験を活かすことで冷水病の被害を小さくできる可能性がある。また自県製のアユを放流することによってブランド化やこれまで県外に流れていたお金が県内に留まることにもなる。このことは内水面漁業の振興にとってもプラスとなり、鳥取県のためにも有益なこと、という結論に達しました。

以上のことにより、協会は寄附行為を変更して、正式にアユをはじめ内水面に関係した魚類の種苗生産と販売に取り組むことになりました。また併せて、アユ種苗生産の先進県の一つである山形県で職員を研修させ、昨年は試験的に生産に挑戦するなど技術の習得に励んできました。本格的な生産の取り組みは始まったばかりですが、今後、協会が得た様々な情報や経験は内水面漁業の発展のために活かしていく所存であります。



放流直後のアユ稚魚

## 海の天気図コーナー 日本海新聞にて好評連載中



H19年6月より、2週間に1回(基本は月曜、月曜が休刊日の場合は木曜)、日本海新聞「さんいん産業ナビ」のコーナー内に「海の天気図」を連載しています。この企画は、九大応力研(九州大学応用力学研究所)から海況予報に関する情報を提供して頂き、鳥取県栽培漁業センター、水産試験場、兵庫県但馬水産技術センターの3機関が共同で窓口となり、連載しています。

「天気予報」は皆さんにとっても大変身近な情報だと思います。天気を判断、予測する上で最も重要な情報源は気圧配置が書かれた「天気図」です。

大気の高気圧、低気圧と同じように、海水も低水温部は水位が低くなり(低水圧)、高水温部は高くなる(高水圧)傾向があり、海流は、これらの水塊配置に大きく左右されます。

九大応力研では、人工衛星などから得られた海面高度、表面水温などの情報を、独自で保有するシミュレーションモデルにより解析し、数日後か

ら数ヶ月後の海況予測情報を発信しています。

日本海新聞の「海の天気図コーナー」では、九大応力研から提供頂いた海況予報情報と、鳥取、兵庫両県の水産研究機関が収集した水産関連情報を「浜だより」として掲載しています。

このような「海の予報」を一般新聞紙面で掲載することは、国内だけでなく、世界的に見ても新しい試みです。

まだご存じなかった方も、「海の天気図」コーナーを是非一度ご覧下さい。

図の見方などがわからない方、より詳細な説明が必要な方は、栽培漁業センターまでお問い合わせ下さい。

# イワガキ増産に向けた酒津支所の増殖の取組



写真1 根固方塊の天端への貼付作業

昨年8月25日に酒津漁港で、酒津支所の漁業者20名が、イワガキ人工種苗3,200個(平均殻高4.2mm)を根固ブロック8基(2.5m×1.7m×1.5m:鳥取市の防波堤工事)の上面に陸上で貼り付けし、海中に沈設しました。

これは、これまで海中に潜って細々と貼り付けていた増殖の方法に代わって、大量に貼付けられないかと、酒津支所の潜水グループ(代表山根支所長)が企画したものです。なお、当該グループの熱意が鳥取市の進めている同港の公共工事(防波堤工事)をも巻き込んで実現したもので、本年の本県を代表する水産振興の最大取組の一つとなりました。

当日作業は、多くの漁業者の方(総勢20名)が実施され、あっという間に終了しました。今回のように、一時に大量に貼り付けすることが出来たのは、初めての試みでした。

貼り付けられた種苗は、(財)鳥取県栽培漁業協会が平成18年夏に種苗生産し、栽培漁業センター内で中間育成していた1年生の稚貝です。海中に沈設した種苗は、今後順調に成長すれば、4年後には『夏輝』として、出荷されることになり、今回の取組に大きな期待がもたれています。



写真3 稚貝の整形



写真2 根固方塊を沈設するため台船に搭載追跡調査！！

設置されて約1ヶ月後の10月2日に潜水して、生育状況を観察しました。沈設工事の時に衝撃で一部剥がれ落ちてしまったイワガキもありましたが、大方の稚貝は生残していました。今後も定期的に潜水調査を行い、生き残りや成長を調査していくことにしています。



写真4 海中でのイワガキの棲息状況



写真5 潜水調査(生残状況の観察)

# 第1回全国ホンモロコ養殖シンポジウム

10月3日～4日の2日間の日程で「第1回全国ホンモロコ養殖シンポジウム」が県民文化会館にて開催されました。主催は鳥取県ホンモロコ生産組合で、県も共催しています。シンポジウムの目的は技術的な交流の他に、ホンモロコの知名度を高め販路を拡大していくことにあります。今大会が初開催ですが、県内外からの多くの参加者に恵まれ、盛大なものとなりましたので紹介したいと思います。

## 1日目午前の部

開会式の終了後、小学生の学習発表からシンポジウムがスタートしました。八頭町の隼小学校の3年生はホンモロコの飼育を総合学習に取り入れており、アイガモを利用したホンモロコ養殖を演劇やダンスを交えて発表しました。

続いて、栄養士会による試食とポスターセッションが同時に始まり、「ホンモロコのクレープ巻き」など、一風変わった料理が提供されました。



午前の部には平井鳥取県知事も参加

## 1日目午後の部

午後の部は滋賀県水産試験場の三枝氏の基調講演でスタートしました、続いて草津市の犬山氏の講演の後、本シンポジウムの発起人である内水面隼研究所の七條喜一郎氏の講演になりました。講演の内容によると、鳥取県のホンモロコ養殖が急

速に普及した背景には、やる気のある生産者と行政、研究機関、栄養士会のスムーズな連携があったとのことでした。

基調講演の後、そのまま実践報告に移り、千葉県、石川県の研究機関から、それぞれのホンモロコ養殖について報告がありました。問題点は鳥取と似ており、どこも同じような問題を抱えているようです。続いて新潟県、岡山県の生産者からの報告がありました。新潟県の山古志村では震災の復興にホンモロコが役立っている他、岡山県では地域の活性化策として利用されているようです。また、鳥取大学出身のJAの職員からも学生時代に行ったホンモロコ池の水質管理の研究報告がありました。1日目の最後に栽培漁業センターからも、シンポジウムの事前に行ったアンケート調査について発表しました。

## 2日目現地見学会

現地見学会は予定以上の参加者で、バス2台での移動となりました。コースは生産者の池の飼育の様子を見学した後、佃煮を販売している「道のえき 清流茶屋かわはら」に寄って休憩、最後に小学生が育てているアイガモ農法ホンモロコ養殖の池を視察した後、内水面隼研究所で昼食会というものでした。昼食会では竹筒を利用したホンモロコ御飯が振る舞われた他、茶の席なども用意され、青空の下、親睦を深めました。



隼研究所での昼食会の様子

# サワラの標識放流調査を始めて

近年、本県のサワラの漁獲量は増加傾向にあり、沿岸漁業者のサワラ漁への期待は、年々高まっています。サワラは、刺網での漁獲量が最も多く、次いで省エネであり元手もかからない一本釣りで漁獲されています。このような中、「サゴシ（当歳魚）がどの程度の期間、近海に留まっているのか？」「どのくらいの速度で成長するのか？」といった漁業者の皆さんの疑問に答え、さらには効率的なサワラの漁獲方法の提言が出来るよう、平成19年度から栽培漁業センター、水産試験場が共同で、サワラの標識放流を開始しました。



図1 標識放流の様子

鳥取県漁協御来屋支所のご協力により、定置網に入網したサワラの第2背鰭基部にチューブタグを装着し（図2）、初夏（平成19年5月16日）に63尾（43～51cm）、晩秋（平成19年11月15日）に121尾（39～57cm）を放流しました。その結果、これまでに5尾の再捕報告がありました（表1、2）。



図2 標識の位置

また、断片的なデータのため、はっきりしたことはわかりませんが、サワラは両時期とも東方海域へ移動（兵庫県豊岡市から福井県敦賀市の定置網で漁獲）する傾向が認められました。まだ本県で再捕されてないことから、サワラの来遊としては、少し留まった後、より快適で餌が豊富な東方へ移動したものと考えられました。

表1 H19.5.16 放群の再捕状況

再捕日	7/2	7/31	8/6
放流後経過日	47日	76日	82日
再捕場所	京都府 京丹後市 網野町 地先	同左	兵庫県 豊岡市 竹野町 地先
尾叉長（cm）	52	54	57
重量（g）	900	1,160	1,240

表2 H19.11.15 放流群の再捕状況

再捕日	11/24	12/7
放流後経過日	9	22
再捕場所	福井県 敦賀湾内	京都府 舞鶴市 野原沖
尾叉長（cm）	50	42.5
重量（g）	640	507

尾叉長か全長か不明

今後も標識放流を継続して行い、さらには日本海側の水産研究機関との調査連携を進め、近いうち日本海側のサワラの生態や移動経路等のより詳細を明らかにしたいと思います。

本誌に関するご意見・ご感想・ご希望等がございましたら、「さいばいだより編集部」までご連絡下さい。

〒680-0801 鳥取県東伯郡湯梨浜町石脇 1166 番地  
 鳥取県栽培漁業センター「さいばいだより編集部」  
 住所：鳥取県東伯郡湯梨浜町石脇 1166 番地  
 電話：0858-34-3321  
 F A X：0858-34-2888  
 E-MAIL：saibaigyogyou@pref.tottori.jp